2014 年 6 月 19 日放送

「第 64 回日本皮膚科学会中部支部学術大会①

大会を終えて」

藤田保健衛生大学　皮膚科
教授　松永　佳世子

学会テーマ「～早く、きれいに、親切に、適切な医療費で治す～
皮膚科の Quality Indicator 医療の質を考えよう」

2013 年 11 月 2 日の土曜日と 3 日の日曜日に、名古屋国際会議場において第 64 回日本皮膚科学会中部支部学術大会を主催いたしました。おかげさまで天候にも恵まれ、招待者 285 名、有料参加者 1,295 名、主催者側の参加者 75 名、総勢 1,655 名の多数の参加をいただき、活気ある学会を開催できましたことを、こころより御礼申し上げます。

最近、全国の大学および基幹病院でも指導力のある熟練した皮膚科勤務医が不足する事態になっており、皮膚科診療と教育および皮膚科学研究の危機を招いています。本学会では、その問題を根本的に解決する道を探すことにしました。学会テーマは「～早く、きれいに、親切に、適切な医療費で治す～皮膚科の Quality Indicator（QI）医療の質を考えよう」としました。

まず、日本でいち早く QI の重要性を提唱し実践していらっしゃる、国際聖路加病院院長の福井次矢先生に、「Quality Indicator：医療の質を測る」と題した基調講演をお願いしました。福井先生は、「われわれ医師に課せられた最大の使命は、質の高い医療を提供することであり、あらゆる医学研究も最終目的は、日常診療における患者の健康に関わるアウトカム（生存率、QOL、費用など）の最良化である。過誤を最小にしつつ最良のアウトカムを実現するためには、EBM を行う必要

がある。どの程度診療ガイドラインに則った診療が現場で行われているか、どの程度期待したアウトカムが得られているのかを客観的に評価し、必要な場合には改善策を実行するという PDCA サイクル（Plan 計画➡Do 実行➡Check 評価➡Act 改善）の導入が重要である。そのためには、医療の質を表す指標（Quality Indicator: QI）の測定が不可欠となる」と述べられ、聖路加国際病院での過去 8 年間の QI と医療の改善活動について示されました。

本学会では、皮膚科診療の QI の提案を、お願いしました。プログラム委員である中部支部 22 大学教授に大学や関連病院等での QI を提案できる候補を推薦いただき、私から中部支部以外の候補を推薦追加させていただきました。29 の皮膚疾患が QI セッションに選択され、各セッション原則2名の講師がQIの提案と診療のポイントを提示いただき、引き続き関連する一般演題を発表いただき、実りある討論を展開していただきました。一般演題は 193 題あり、この中で 100 題は QI セッションに、93 題はポスター発表に選択させていただきました。

本学会では、3つのシンポジウムを企画しました。第1に「皮膚幹細胞研究の現状ー再生医療の実現に向けて」、第2に「皮膚アレルギーの最新情報」、第3に「Quality Indicator を考えた美容皮膚科診療」、そして第4に「『皮膚外科　困ったとき』～私はこうしてみました～」です。また、皮膚科の臨床像を重視した皮膚病理の CPC は、こんなにも CPC が楽しいものだとは知らなかったとの感想をいただきました。

また、招請講演としてインド、ムンバイから The International League of Dermatological Societies 理事、Hemangi Jerajani 先生をお招きしました。先生とは 20 年来接触皮膚炎研究で知己の間柄であり、お互いに International Contact Dermatitis Research Group の班員として活動をしてまいりました。今回は、Leprosy & Cutaneous Tuberculosis: Scourge of India と題し、インドに多く見られる「皮膚結核とハンセン病」についてご講演いただきました。

このほか、 22 のスポンサードセミナーが開催され、多くの教育的講演や新しい診療情報が提供されました。そのなかの2つは、看護師等コメディカルのためのハンズオンセミナーでした。「スキンケア・メイク」と「洗い方・塗り方」を小グループで実技を交えて学びましたが、皮膚科診療において明日からの患者指導に役立つと大好評でした。

女性医師支援と、親子ともに楽しい学会

さて、本学会のもう一つのテーマは、女性医師支援と親子ともに楽しい学会でした。子育て中の皮膚科医に親子ともに学会参加を楽しくする、託児サービスとキッズツアーを企画しました。キッズツアーは、おもに小学生を対象としましたが、養育者が参加するなら低年齢のお子様も参加可としました。土曜日、日曜日に、日替わりコースで保育引率付きで名古屋市水族館、東山動植物園、名古屋

城、トヨタミュージアムなどを訪れ、楽しく美味しいツアーを企画しました。医局の医師も子供連れで参加しました。2日ともに、多数の参加があり、楽しい想い出になったと好評でした。

また、皮膚科の女性医師を考える会主催のメンターによるメンティー相談会が開催され、ワークライフバランスについての知恵と経験が共有され、元気をもらい一歩を踏み出せる勇気を得たとの感想をいただきました。

土曜日の懇親会は、広い会場に、みそだれの付いた名物の串カツ、きしめん、天むすをはじめ、場内一杯にいわゆる名古屋飯を用意いたしました。また、余興として「名古屋おもてなし武将隊」が登場し、剣舞も親子ともにお楽しみいただいたことと存じます。そして、日曜日は私が顧問をしております藤田保健衛生大学医学部茶道部の有志によるお菓子と薄茶のサービスをさせていただきました。医学生の一生懸命な清々しさが好評でした。学生たちも参加者の先生と交流させていただき、よい経験となり感謝しております。

学会のイメージキャラクター「クオリン」のデザインと意味付けは矢上晶子准教授の創作です。名前は学会テーマの中にある「Quality Indicator」の略称風。品質を大事にする武将のキャラクター。兜の家紋は保健衛生大学のシンボルマーク、手に持っているのは医療の質を測るノギス、設定は尾張の武将、戦略・戦術の品質に重きを置いたらしい。桶狭間の合戦に参加したらしいが活躍した記述は残っていない。・・・と歴史番組風ですが、このクオリンとともに、皮膚科の医療の質を考える試みが本学会で行われたことを覚えていてくださるとうれしく存じます。

ロドデノール、加水分解コムギの対応の中での準備

さて、学会準備もたけなわの昨年 7 月4日に、美白剤ロドデノール配合化粧品による脱色素斑（白斑）の問題が明らかになり自主回収に踏み切りました。正しい情報を患者さんや医療者に提供することが急務であることは明らかでした。そのために実態調査、病態解明、治療方法の検討を行うことを到達目標として、7月17日に日本皮膚科学会のなかに「ロドデノール含有化粧品の安全性に関する特別委員会」が発足し委員長を拝命しました。その後患者さんへの FAQ の作成・改訂、

医療者への診療の手引きの作成・改訂、一次調査票の集計とまとめ、病態解明の会議などに委員会は睡眠時間を削りながら活動していきました。マスコミ対応にも追われ、8 月の取材や 9 月のその放映と学会事務所での記者会見など多忙を極めました。ここで活躍したのは、刈谷豊田総合病院皮膚科鈴木加余子部長でした。実は 7 月から 10 月までに加水分解コムギグルパール 19S のゲノムの研究のために、患者さんから血液を提供いただく大事な期間にも一致していました。

この大混乱の中で、本学会の企画や運営を滞りなくすすめてくれたのは、矢上事務局長であり、その功績を高く評価したいと思います。また、診療・教育・研究、そして、学会準備と運営に絶大なるチームワークを発揮してくれた実行委員の 31 名の医局員一人一人を誇らしく思うと同時に心から感謝しています。

当日参加くださった全国の皮膚科医のみなさま、そして加水分解コムギの特別委員会とロドデノール特別委員会の2つの委員会の委員の先生と協力いただいた先生方にも心より感謝します。

おわりに

藤田保健衛生大学は名古屋市の南に位置します。救急医療、癌治療から訪問看護在宅医療、緩和ケアなど、すべての医療に対処できる総合医療大学です。病床数 1,505 床で全国最大の病床数を持ち、全国で第4位の優れた教育病院と DPC のデータから評価されています。2015 年 5 月には新しい病棟が完成予定で、さらに創立 50 周年記念事業としての環境整備もすすんでいます。そのような勢いのある医療環境、大学環境の中に皮膚科学教室を持っていることを感謝しています。初代の上田宏教授の「和」の教室運営を継承し、「人を活かす」「活」の字を加えることが私の使命と考えています。教室の主な仕事である、皮膚アレルギー、皮膚外科、美容皮膚科、幹細胞・再生医療の研究を基礎に、これからも「～早く、きれいに、親切に、適切な医療費で治す～」医療を実践していきます。その成果は、本学会で提唱いただいた QI によって評価されると考えています。

本学会を契機に、私たち皮膚科医が提案した QI をみんなで使い、互いに切磋琢磨して、よりよい皮膚科診療を行うことで、皮膚科の魅力を増し、リサーチマインドのある皮膚科医を増やし、社会の皮膚科医への認識が高まることを期待しています。